

ラウラ・ミンテギ氏が石井至のインタビューに答える！



ラウラ・ミンテギ（Laura Mintegi）氏とは、日本の皆さんには耳慣れない名前だるうが、二〇一二年十月に行われたスペイン・バスク州議会選挙で、バスクの独立を掲げて第二党に躍進した e h B i r d u（イー・エイチ・ビルドゥ。以下、「ビルドゥ」）の党首である。今般（六月十八日）、一水会外交アドバイザーの石井至が、スペイン、ビルバオ市内のホテルで独占インタビューに成功し、選挙から九か月経った現在の情勢を聞いた。

（編集部）

Q 昨年の選挙では、御党は躍進しましたね。

A ビルドゥは四つの政党が新しく作った政党で、まだ結成からわずか一年です。党名の e h はバスク語で「バスク」を意味する Euzkai Herria を表し、bildu は「結集」を意味します。躍進したのは我々の「バスク独立」という主

張が広く支持されたからだと思っています。

Q バスク独立というところ、歴史をたどると、バスクは、もともとスペインやフランスが成立する前から国として成立していました。たとえば、バスク語というのはヨーロッパでは最古の言語で、三千年の歴史があるとされています。驚かれるかもしれませんが、古い言語だと思われているラテン語はわずか四千年の歴史しかありません。バスク語に比べると「新しい言語」だと言えます。バスクは古い歴史、独自の言語、独自の文化があり、一つの国であるべきだというのが我々の主張です。最近では、イデオロギーの問題

に加え、現実的な経済問題があります。バスクの経済は比較的堅調ですが、このままではスペインの経済破綻に巻き込まれます。生活を直撃するおそれがあるのです。スペインでは破綻した銀行にお金をつぎ込んでいますが、それには反対です。リアルな経済にこそお金を注入すべきです。バスクがそういう間違えた経済運営の犠牲になるのは社会正義に反します。

Q 第一党の P N V（バスク国民党）は、バスク州の自治権拡大を主張していますが、組む余地はありますか？

A P N V の一部は我々と同じような主張をしています。主流派は、最終的に

は独立するにしてもまずは自治権を拡大するという考えです。つまり、ステップ・バイ・ステップで進む考えですが、我々はもっと早い独立を目指しています。

住民の中には、第一党の P N V と第二党の e h B i r d u が組めば七割以上の議席を占めるから連立すべきだという意見もありますが、今述べた違いがあるので連立は実現していません。また、基本的に P N V は右翼政党ですが、我々は社会主義で独立を目指す政党です。

Q 独立と言っても、スペインの憲法では独立の是非を問う住民投票（リファレンドム）を禁止しています。憲法を改正するには議会の六割以上の賛成と国民投票における過半数の確保が必要ですが…

A 我々はそういうアプローチは考えていません。まずは住民の意思を大切にすべきだと考えています。Q 世界では他にも同じように独立を目指す地域がありますね。

A スペインではバルセロナを首都とするカタロニア、海外ではスコットランド、モンテネグロなどの地域があります。とりわけスコットランドでは二〇一四年に住民投票が実施されます。来年は重要な年です。

Q 具体的にはどのようにして独立を達成する考えですか？

A バスクでは、まずはピース・プロセスを実現しないといけません。二年前に E T A（バスク祖国と自由）が武装闘争停止を宣言しました。我々は暴力に反対です。武装闘争停止は好ましいことです。しかし、今、スペイン政府がやろうとしていることは間違っています。何をやるうとしてるかと言うと、たとえば来月（二〇一三年七月）に約二百人が E T A に関わったとして逮捕されようとしています。しかし、

その二百人の人たちはバスク独立運動はやっていましたが、E T A の武装闘争には関わっていません。スペイン政府は、バスク独立運動を押さえつける目的で E T A にかこつけて運動者を逮捕しようとしているようにすら思えます。まずは、この問題を解決しないといけません。これがカタロニアとバスクの違いです。カタロニアにはこの問題はないので、彼らはすぐに住民投票に進むことができます。

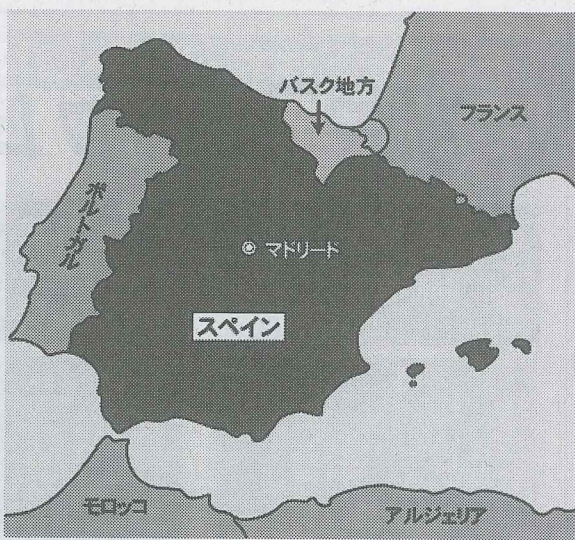
Q 独立が実現したら E U には加盟しますか？

A. そのときの状況によります。たとえば、E U から離脱する国が出てきたり、E U R O 導入の明らかなデメリットが明らかになってきたときは、E U に加盟しない、あるいは加盟しても E U R O を採用しないなどの決断があり得ます。

Q 日本の印象は？

A. 我々が目指すのは、教育を強化することでテクノロジーを育成し、競争力のある産業で輸出を促進するという形です。これはまさに日本が行っていることです。また、日本では家族を大切にしていると聞きますが、これも我々と同じです。だから日本には親近感を持っています。

私はバスク・ペンクラブの会長をしています。二〇一〇年に国際ペンクラブの総会が日本で行われた際に、日本を訪問したことがあり、素晴らしい国だと感銘を受けた記憶があります。



スペイン・フランス国境付近にあるバスク地方